

第3章 接続期のカリキュラム作成の視点

この章では、接続期のカリキュラムを作成する際の視点を5歳児後半と小学校1年生1学期の2つの時期に分けて述べていきます。

1 5歳児後半のカリキュラム作成の視点

5歳児後半のカリキュラムを作成する際に留意することは、その時期の発達にふさわしい経験を積み重ねるようにすることです。そのために、以下の4つの視点から保育を計画するとよいでしょう。

- (1) 協同性が発揮できる遊びを充実する
- (2) 身近な自然や地域社会に触れることができる保育環境を工夫する
- (3) 小学校入学に向けて自立心や自信を高める体験を積み重ねる
- (4) 保育のPDCAサイクルを確立する場を設定する

(1) 協同性が発揮できる遊びを充実する

子ども自らによる協同的な遊びの成立

5歳児後半になると、気の合った友達と遊ぶだけでなく、学級で共通の目標をもち、集団の中での自分の役割を理解して、活動することができるようになります。子どもは、集団で活動する中で、自分の思いを伝える、友達と折り合いをつけるなどの経験をし、みんなで協力し合うことの楽しさやルールを守ることの大切さを知ります。そして、一人で活動するよりも、充実感や達成感が得られることを実感していきます。

この時期、保育者は、子どもがこのような協同性が発揮できる遊びを経験するように保育を計画することが重要です。しかし、それは、保育者が最初から「これからクラスみんなでお店屋さんごっこをします」などと一方的に話し掛けるのではなく、あくまでも、子ども自らが友達と一緒に遊びたい、友達と一緒に作りたいと思うことが大切です。そのために、保育者は、まず、日頃の保育から子どもの好きなことや友達との関わり方を把握し、一人一人が十分に興味関心をもって関わり、試行錯誤したり、工夫したりできるような遊びの環境を整えることが大切です。



行事等をきっかけにした保育環境の工夫

各園では、運動会や親子遠足、お遊戯会、豆まきなど、様々な行事が行われます。その後、例えば運動会の楽しさを経験した子どもは、園庭にコースが引いてあったり、バトンが用意されていたりしたら、リレーごっこを始めるかもしれません。リレーだけではなく、玉入れや障害走ごっこなども考えるかもしれませんし、クラス運動会を計画するかもしれません。行事をきっかけに、子どもの遊びが発展していくことがありますので、子どもの興味・関心を受け止めながら、保育を計画しましょう。

子ども同士が関わりあう場の設定

協同性が発揮できる遊びを充実・発展させるためには、子ども同士が関わりあう場を意図的に設定することが大切です。子どもが友達と一緒に活動していることを認め、そのよさや価値を他の子どもに紹介したり、子ども同士が次の活動の見通しをもてたりするように、話し合いや振り返る機会を設定するとよいでしょう。



(2) 身近な自然や地域社会に触れることができる保育環境を工夫する 自然の不思議さおもしろさを取り入れた保育環境の工夫

子どもは、身近な自然の美しさや不思議さに触れて感動する体験を通して、自然の変化などを感じ取り、関心をもつようになります。5歳児後半には、一層の好奇心や探究心をもって関わり、気付いたことや考えたことを言葉で表現しながら、自然事象について更なる関心を深めたり、愛情や畏敬の念をもったりするようになっていきます。

ゆえに、秋から冬、春先にかけての自然の変化を保育環境に上手に取り入れていくと、子どもの好奇心や探究心を刺激し、遊びが発展します。秋の草花や木の実、冬に吹く強い風、凍った水溜りなど、子どもは、自然の不思議さやおもしろさに気付いて、それらを遊びに積極的に取り込もうとし、鬼ごっこを始めたり、草木や木の実を使った物作りからお店屋さんごっこに発展させたりすることでしょう。「木の実や落ち葉をたくさん集めておく」「いろいろなカップやバケツを用意しておく」など、ちょっとした保育者の仕掛けで、子どもは好奇心や探究心を刺激され、自ら意欲的にそれらに関わり、遊びを創造していくことができます。

身近な地域社会とのつながりを意識する機会の設定

また、子どもは、幼稚園・保育所・認定こども園等での生活を通して、担任との信頼関係を基盤としながら、園内の職員や子ども、保護者など身近な人と親しみをもつ

て関わるようになります。5歳児後半になると、身近な人との触れ合いは、地域の小中学生や高齢者、働く人々などに広がっていくことでしょう。いろいろな人と触れ合う体験を重ねる中で、人との様々な関わり方に気づき、相手の気持ちを考えて行動したり、自分が役に立つ喜びを感じたりして、地域に親しみをもつようになります。

地域の祭りに参加したり、公共施設を訪れたり、商店に買い物に出掛けたり、園の周りを掃除したりするなどの活動は、この時期の子どもにとって、自分と地域社会とのつながりを意識することができる価値ある体験となるでしょう。保育者は、園内外の物的人的資源を十分に活用した保育を計画することが大切です。



(3) 小学校入学に向けて自立心や自信を高める経験を積み重ねる生活上必要なことの定着

卒園が近づく子どもにとっては、小学校への期待が膨らむ一方、不安も高まることが予想されます。この時期、子どもが小学校への安心感を抱くことができるように、小学校の生活の様子を知らせたり、自分にできることを増やし自信をつけさせたりすることが大切です。

衣服の着脱、食事、排泄などを自分の力だけで行うことができたり、生活の流れを予測し時間を意識して行動したり、健康に対する関心を高め、うがい・手洗い・歯磨き等に進んで取り組んだりすることは、小学校生活でも必要なことです。保育者は、子どもの習得状況を確認し、一人一人が自分でできることを増やし、自信をもって生活できるように援助していきましょう。「自分はこれだけのことができる」という自信が、小学校生活に対する不安を小さくし、安心して入学に向う気持ちを育むことができるのです。

小学校との交流計画の立案

子どもが小学校生活に見通しをもつことができるようにするためには、小学校と連携し、交流の計画をすると効果的です。交流の内容は、様々考えられます。実際に小学校を訪れて、4月から生活する教室や校庭を見学したり、小学生と一緒に遊んだり給食を食べたりすることで得られた楽しさは、小学校生活への期待を膨らめることができます。小学



生が園を訪問することも同様の効果が期待されます。子ども同士の交流が難しい場合は、小学校の教師を招いて、学校生活について話を聞いたり、小学生からの手紙を読んだりするなど、それぞれの園の実情に合った交流を計画するとよいでしょう。

(4) 保育の PDCA サイクルを確立する場を設定する

「いつ」「どこで」「だれを」の明確な位置付け

前章でも述べましたが、幼児期の教育は、遊びを通して、子ども一人一人が幼児期にふさわしい資質・能力を育てていくものです。よって、保育者は子どもの思いや願いが実現するための援助をすることが大切です。そのために、保育の PDCA サイクルを確立することはとても重要です。保育計画を立てる際には、いつ、どこで、だれをどのように見取るのか、見取ったことをもとに、いつ改善を図るのか、意図的に設定しておくといよいでしょう。こうすることで、確実に PDCA を実施することができます。

複数の保育者による協議

改善にあたっては、複数の保育者で協議していくことが大切です。担任一人の偏った見方ではなく、他の保育者や支援員等の多様な見方を取り入れることで、子どもが本当に必要とする援助や時期や発達にふさわしい環境を提供していくことができます。その際、「幼児期の終わりまでに育ててほしい姿」は子どもを見取っていく際の視点として活用することができます。保育記録の取り方を工夫し、この視点に沿って協議をすることによって、一人一人のこれまでの育ちや今後伸びてほしい育ちを明確にすることができます。

2 小学校1年生1学期のカリキュラム作成の視点

小学校1年生1学期のカリキュラムを作成する際に留意することは、新しい環境に慣れ安心して学校生活をスタートするとともに、幼児期の教育を通して育まれた資質・能力を十分に踏まえ、主体的に自己を発揮しながら学びに向うことができるようにすることです。

そのために、以下の4つの視点からカリキュラムを作成するとよいでしょう。

- | |
|--|
| <ol style="list-style-type: none">(1) 幼児期の育ちを踏まえた指導の在り方を工夫する(2) 生活科を中心に合科的・関連的な指導を工夫する(3) 弾力的な時間割を設定する(4) 全校で協力体制をつくり取り組む |
|--|

(1) 幼児期の育ちを踏まえた指導の在り方を工夫する 幼児期の育ちの把握

カリキュラムを作成するにあたっては、まず、子どもの実態を把握します。そのために、幼稚園教育要領や保育所保育指針等を読んだり、要録等を活用したりすることが考えられますが、実際に、幼稚園・保育所・認定こども園を訪問し、保育者と意見交換したり、保育参観をしたり、施設の様子を見学したりすることが効果的です。園での生活のリズム、遊びの様子、人への関わり方、給食の配膳や掃除の仕方、保育者の声掛けの仕方、トイレや手洗い場、靴箱の大きさ等、小学校との共通点や相違点を知ることで、子どもが感じる幼小の段差を予想することができます。また、発達のプロセスが分かり、今後の成長の姿を見通すことができます。特別な支援が必要な子どもについては、個別の指導計画や個別の教育支援計画についての情報交換も重要です。

近年、県内において、近隣の幼稚園・保育所・認定こども園と合同研修会を行う小学校が増えつつありますが、お互いの教育・保育を理解する上でとても有意義なことです。このような研修会の充実は、幼児期の育ちの様子や保育の在り方を生かした接続期のカリキュラムの作成を促進していくことでしょう。

入学当初における安心や楽しさを抱かせる指導の工夫

小学校入学によって、子どもを取り巻く環境は大きく変わります。入学当初は、子どもが安心して学校生活を始めることができること、「学校が楽しい」と思えるようにすることが大切です。

子どもは、活動の見通しがもてると安心します。そのため、分かりやすく学びやすい環境づくりに心掛けましょう。1日の生活の流れや、トイレ、手洗い場、靴箱、ロッカーの使い方、給食の配膳の仕方などを指導する際は、掲示物を活用して視覚的にも分かるように工夫するとよいでしょう。園での生活と大きく違うところは、時間をとって丁寧に指導したいものです。

また、幼稚園・保育所・認定こども園では大きな机を囲んで活動することが多いのですが、小学校では一人一人に机が割り当てられることが一般的です。活動によっては、机と机を向かい合わせるなど園と同じ環境をつくり、友達同士、顔が見える中で取り組ませると安心感を抱かせることができます。



子どもは、教師や友達と関わる活動を通して、出会いの喜びや学校の楽しさを感じます。4月の初めに、新しい友達や担任との関係を築くための活動を設定する際は、歌や読み聞かせ、手遊びやリズム遊び、体全体を使った身体表現など幼児期に親しんだ活動を取り入れると安心して楽しく活動することができます、効果的です。

「自分で分かった、できた」と実感できる指導の工夫

子どもは小学生になると「学ぶ」という行為を自覚します。そこで、子ども自ら「分かった」「できた」と実感すると学習意欲が高まります。ですから、授業での支援や指導は、子ども一人一人を見取りながら活動を価値付けたり、よりよくなるようにアドバイスしたりすることを心掛けましょう。

また、友達と伝え合う場や活動を振り返り表現する機会を意図的に設定します。それにより、子どもたちは、幼児期に協同的な遊びを通して味わった「仲間と一緒に活動した喜び」や「思いや願いを伝え合う楽しさ」が小学校の授業にもあると気づき、学ぶ意欲や主体性、協同性をさらに伸ばしていくことでしょう。



子どもは、園生活において、片づけや掃除、当番の仕事をしてきました。また、集団でよりよく生活したり楽しく遊んだりするためには約束やきまりが必要であることも体験してきています。このような体験を生かし、当番や係の仕事内容、清掃の仕方、学級内のルールなどを子ども同士で考えさせることは意義あることです。もちろん、1年生にとって子ども同士で話し合うことは難しいので、教師の声掛けは不可欠です。そこでは、「幼稚園ではどんな仕事をしていた？」と聞いたり、上級生の活動を見学させたりしてから、「どんな係をつくるといいかな？」などと働き掛け、豊かな対話が図られるように進めるとよいでしょう。

大切なことは、学習にせよ生活にせよ、子どもが、自分たちで考えて判断し行動するという意識をもつこと、そして、それが価値のあることだと実感することです。

関わりを広げ、自己発揮できる指導の工夫

遊びや学校探検を一緒にしたり、学校の生活や行事を聞いたりするなど、他学年との交流も意図的に設定したいものです。1年生は、上級生と関わることで「分からないことを教えてもらえる」「困ったことを助けてもらえる」など、安心感を抱くことができます。また、「こんなことができてすごい」「自分もやってみたい」「あんなふうになりたい」など、あこがれや目標をもてるようになります。一方、上級生は、1年生と関わることで、一人一人を大切にできる気持ちや、上級生としての責任感を自覚します。他学年との交流を計画する際は、交流する学年の担任と目的や意義、指導上留意する点などを共通理解しておく必要があります。



幼児期に子どもは、遊びに没頭する中で生じた驚きや発見をもとに、遊びを発展させたり、新たな遊びを創造したりしてきました。小学校では、各教科等において学ぶ内容が定められていますが、体験や活動から生まれた驚きや発見、疑問などから、自分なりの課題をもち、その解決に向けて学びを進めていく過程は、幼児期の遊びに通じるものがあります。教師は、子どもたちの幼児期の学びを十分に理解した上で、子どもが学習教材に興味・関心を抱くよう工夫をするとともに、子どものつぶやきなどから思いや願いを把握し、子どもの意識に沿った授業を展開することが大切です。このような学習の繰り返しで、子どもはより一層主体的に自己を発揮し、学びに向かうことができるようになります。

(2) 生活科を中心に合科的・関連的な指導を工夫する 接続期における生活科の役割

学習指導要領では、幼児期における遊びを通じた総合的な学びから教科等における学習に円滑に移行するために、生活科を中心に合科的・関連的な指導を工夫することを求めています。

なぜ、生活科を中心にするのでしょうか。

生活科は、自立し生活を豊かにしていく資質・能力の育成を目指しています。そのため、子ども一人一人が自分の思いや願いをもとに具体的な活動や体験をし、身近な人や社会・自然に直接関わる中で感じたり考えたりしたことを表現する学習過程を大切にしています。子ども自ら環境に関わり、自分の思いや願いを実現していく生活科の学習過程は、幼児期の遊びの過程に通じるものがあります。生活科が、幼児期の教育と小学校教育を円滑に接続する機能をもっている理由はここにあります。

合科的・関連的な指導の重要性

生活科は、他教科等との関連を図ったり、生活とつながる学習活動を取り入れたりすることで、一層の学習効果が期待できます。他教科等でばらばらに身に付けた知識や技能を生活科の活動や体験の中で活用したり、生活科における学習活動が他教科等の学習の動機付けや題材につながったりするからです。

例えば、「みんなであそぼう（写真参照）」という単元では、図画工作科で学んだはさみやのりの使い方などの知識や技能を生かして遊び道具を作成します。そして、算数科で学んだ計算の仕方を生かして、遊び方（得点を決めて合算する）を考案することが可能になるでしょう。また、「公園に行こう」という単元では、身近な公園に出掛け、自然の美しさや不思議さに気付いたり驚いたりした体験が、文章で表現する学習（国語科）や絵や歌での表現活動（図画工作科・音楽科）に発展することが可能となります。



このように、生活科を中心に他教科を関係付けて合科的・関連的な指導をすることで、幼児教育と同じように総合的な学びを通して、各教科で育みたい資質・能力が身に付けられるのです。

教師は、接続期を柱に、低学年の2年間を見通しながら、生活科と他教科の目標や学習内容を俯瞰することで、つながりや関係を意識し、教科等横断的な視点をもって教育課程の編成、実施上の工夫を行うことが大切です。

(3) 弾力的な時間割を設定する 子どもの発達や学びの特性を踏まえた時間割の設定

幼稚園・保育所・認定こども園等と小学校では生活のリズムが違います。時間の区切りが子どもの活動や展開に沿って設定する園と違い、小学校では1コマ45分の時間で授業を設定し、授業と授業の間に10分程度の休み時間を設けています。この生活リズムの違いは、子どもにとって、大きな段差となります。そこで、小学校入学当初は、幼児期の生活のリズムを踏まえて、弾力的に時間割を設定するとよいでしょう。例えば、朝の会から1時間目までを連続した時間として設定し、幼児期に親しんできた手遊びや歌、読み聞かせ、リズムにのって体を動かすことなどを学習活動に取り入れ、子どもが楽しい気持ちで1日をスタートすることができるようにすることが考えられます。また、時には、2時間続きの学習活動を設定し、子どもが自らの思いや願いの実現に向け、じっくりと活動に取り組めるようにすることも大切です。机に向かって何かを書いたり黒板を見たりする学習は、子どもの集中力などを考慮して15分や20分程度のモジュールで時間割を構成する工夫も効果的です。

弾力的な時間割の設定期間に関する留意事項

弾力的な時間割を設定する際は、そのような時間割をいつまで設定するのか、本来の小学校の生活リズムをいつまでに子どもに確立させるのか、教師が見通しをもつことが大切です。朝活動や業間活動など、学校全体の活動にいつ頃から1年生を参加させるのかなどの予定を踏まえ、計画的に設定していきましょう。

(4) 全校で協力体制をつくり取り組む 全職員による協力体制の構築

1年生のカリキュラムを充実させるためには、全教職員で協力体制を組むことが重要です。

特に、入学当初はティームティーチングで一人一人に丁寧に関わると、子どもは安心して学校生活を始めることができます。年間を通じて複数の教職員を配置することが難しい場合でも、特定の期間であれば、複数の教職員が1年生の教室に入ることができるよう時間割を工夫することが可能です。



生活科の活動で、学校探検をしたり、他学年と交流したりする際も、多くの教職員と連携をすることで、活動が豊かになり、一層の学習効果が期待できます。

全教職員で協力体制を組む際は、接続期のカリキュラムの意義や考え方を共通理解し、全校で1年生を見守り育てる意識をもつことが大切です。

保護者や地域、幼稚園・保育所・認定こども園の保育者との連携

さらに、保護者や地域の人々に、接続期のカリキュラムの意義やねらい、主体的に学ぶ子どもの様子などを伝えることは、学校への信頼感を生み出すとともに、学校教育への理解と協力を得ることが可能となり、地域の人的・物的資源の活用の充実が一層図られることを促進します。

また、カリキュラムの実施にあたっては、子どもの実態に即して、見直しを行いながら改善し、次年度につないでいくことが重要です。その際、幼稚園・保育所・認定こども園の保育者にも見てもらい、改善のための協議を行うことも、双方の取組を振り返るために効果的です。